

## 真理と表現

### メルロ＝ポンティ『世界の散文』における真理の問題

八幡恵一

本稿では、モーリス・メルロ＝ポンティが『世界の散文』という著作で展開している「真理 (vérité)」の理論について論じる。以下に述べる理由からこれまであまり注目されてこなかったが、彼が同書で素描している真理の概念は、古典的な定義をポジティブに逸脱する興味深いものであり、個別の分析に十分に値する。そこでメルロ＝ポンティは「真理」について、プラトンのいうイデアの真理とも「知性と事物との合致」という伝統的な解釈からも距離をとり（むしろそれらに抗しつつ）、きわめて独特な定義を試みている。

本稿の議論は以下の手順にしたがって進められる。まずは『世界の散文』で真理が問われる背景を確認し (1)、続いてその背景の延長からメルロ＝ポンティが展開する真理の理論の独自性について論じる (2)。そして最後に、(2) で明らかにした真理の理論が「表現 (expression)」という概念によって特徴づけられることを示す (3)。

#### 1. 真理の問題

編者であるクロード・ルフォールによれば、『世界の散文』は1950年の前後に計画・執筆されたが、コレージュ・ド・フランス就任（1953年）のころに途中で放棄された遺稿であり、その完成度は決して低くはないが、それでもほかの公刊著作に比べればやはり全体として議論に多少の緩みがみられる。これは「真理」を扱った章（ルフォールによって「アルゴリズムと言語の謎」と題されている）についても例外ではなく、きわめて濃密な議論がしばしば整合性を欠いた論理と構成によって展開され、読むものを少なからず戸惑わせる<sup>1</sup>。

しかしこの章には（少なくとも『世界の散文』の内部では妥当な）書かれるべき必然性が存在しており、その必然性にもとづいてメルロ＝ポンティは独特な真理の理論をつくりあげていく。うえで予告したとおり、本節ではまず導入として、『世界の散文』において真理の概念が問われるこの必然性について明らかにしたい<sup>2</sup>。

先に述べたように、この著作のなかで真理の問題が提起されるのは「アルゴリズムと言語の謎」と題された同書の後半の章であるが、メルロ=ポンティはこの章を言語の「意味(signification)」がもつとらえがたい性質を指摘するところから始めている。つまり彼によれば、言語の意味というのは「われわれがそれをとらえると思っているところよりいつも少しだけ遠くに」あり、必ずしも「直接的な把握には従わない」<sup>3</sup>。メルロ=ポンティはポーランの美しい言葉を引きつつ、言語の意味のこの間接的な性質を次のようにあらわしている。すなわち「それを見よう(voir)とするものには感じとることができるが、それに目をこらす(regarder)ものには隠されてしまう微光」<sup>4</sup>のようなものであると。

こう述べた後、続いてメルロ=ポンティは言語の意味のこの「微光(lueur)」のような性質を、みずから「働きつつある言葉(parole en exercice)」と呼ぶ言語の特異な「出来事」によって説明しようとする<sup>5</sup>。『知覚の現象学』の「語る言葉(parole parlante)」を思わせるこの「働きつつある言葉」は、すでになされている思考をたんに「指示する」ことに甘んじるものではなく、それはむしろ思考そのものであり、そのためこの言葉が機能するかぎり「対話のうちでも心のなかのひとりごとでもいわれる『思考』などありはしない。「言葉を引き起こすのは言葉であり、われわれが十分に『思考する』ならば、そのとき言葉はわれわれの精神をすっかり充たしてしまい、純粋な思考や言語的でない意味が住まう余地を残すことはない」<sup>6</sup>。このようにわれわれの精神は—ひとりごとするときですら—何らかの「言葉」によって充たされており、「純粋な思考」が存在するという考えは錯覚に過ぎない。言葉は思考や思考の行う客観化の作用の対象とは決してなりえず、なぜなら言葉そのものがすでに思考だからである。

言葉なき思考も思考なき言葉も不可能だというこの事実が、まさに「言語はそれを探すものからは逃れるが、それをあきらめたものには与えられる」<sup>7</sup>という先に述べたもうひとつの事実を説明してくれる。つまりわれわれが言語を「正面から(en face)」見据えることができないのは、それがわれわれの思考とひとつになっており、思考による反省のまなざしを逃れるからである。言語は生きたものであり、意識が行う客観化の作用のつねに手前にとどまるため、われわれはこの「生きた言語」<sup>8</sup>を思考するということができない。たとえばこの言語を概念に铸なおすことで、ひとつの反省の対象とすることは不可能ではないが、しかしこのとき言語はもはや「生きて」おらず、また「働きつつある」という動性も失われ、むしろ「二次的な(à second degré)」ものへと変じてしまっている。「働きつつある言葉」あるいは「生きた言語」は「純粋

な思考」のレベルではとらえられず、したがって「言葉の働きを何らかの精神の純粋な働きによって置きかえる」<sup>9</sup>ということとはできない。

とはいえ、だからといってわれわれは—ポーランのように—たんに言語「である」というだけで満足するわけにはいかない。たしかに自我論的な反省によって言語をつかまえることはできないが、メルロ=ポンティが述べるように、しかし「みずからの対象を構成したり、その対象と敵対したり、あるいはそれをもはや対象のものではない光によって照らしたりするとはいわないような反省や哲学がある」<sup>10</sup>。そして彼によれば、この新しいタイプの反省や哲学は、たんに言語の分析をあきらめたり、あるいは「二次的な」言語にかかわるのではなく、むしろ「生きた言語」に特有の「謎 (mystère)」へと向かう。ルフォールによって章の表題にも選ばれたこの「言語の謎」というのは、メルロ=ポンティいわく「言語がこのように[言語はそれ自身にのみかかると直前でいわれている]みずからによってとり憑かれているまさにそのときに、まるでおまけのようにわれわれを意味へと開いてくれる」<sup>11</sup>ところにある。ここで重要なのは、言語(の意味)に必然的に付随するこの「おまけ (surcroît)」の現象であり、つまり言語が孕む「謎」とは、それがみずからに対して張りだすこと、主体の精神をすっかり充たし、主体の完全な制御のもとでびったりと閉じきったシステムだと思っていたところに突如生じる、その—自己に対する—いわば過剰の力のことなのである。

じつは言語がもつこの過剰性とそれによる独特な意味作用こそが、まさに『世界の散文』のすべてを貫く力線のひとつとなっており、同書が示すところによれば、この力はたんに文学的な作品のみならず、たとえば他者の対話のうちでも作動している。対話においては他者の言葉が私の思考を超越し、まったく新たな意味へと私を連れ去り、さらに究極的にはそのとき私は他者に「なる」とまでいわれる<sup>12</sup>。このように「言語の謎」が意味するところとは、それが純粋な意識としての主体の制御を離れた自律的かつ超越的な働きを行いうるという事実であり、われわれはこれを端的に言語の〈過剰の現象〉と呼ぶ<sup>13</sup>。

しかしながら、このような過剰の現象は何も「生きた言語」にのみとおかれていたわけではない。それはむしろ潜在的にはあらゆる言語のうちにひそんでおり、たとえばメルロ=ポンティはこの「語る力 (puissance parlante)」<sup>14</sup>を、彼が「アルゴリズム」と呼ぶ数学的な領域のうちにも探し求めようとする。

もしわれわれが語る力を次のような事例のうちにも見いだすことができるとすれば、おそらくわれわれはこの力をさらによくみてとることができるだろう。その事例とはすなわち、言語を強制して、それがもはや任意かつ厳密に定義されなかったようなことは何も語らず、みずから所有していなかったようなものは何も指し示さないまでに仕向け、アルゴリズムとしてみずからを再構築するために自身の過去までも否定するという事例、それゆえ真理がもはや文学や哲学の言語に住み着く—どこにでもあるが決して場所を突き止められない—〈浮遊する精神〉では原理的になくなっており、むしろそれが、われわれによって定式化される以前にも真であったし、すべての人間とその言語が消え去ることになったとしてもやはり真であるような不動の関係性の領域となっている事例である<sup>15</sup>。

メルロ=ポンティはこのように「アルゴリズム」のうちにまで「語る力」を—つまり言語の過剰の現象を—見いだす必要があると述べる。アルゴリズムはふつうそのような力とは対蹠的な次元で機能するプログラムとみなされる。それは永遠に真理であり続ける「不動の関係性の領域」であり、このような純粋に人為的な—語りえるものしか語らない—領域では、言語がおのれに対して過剰となることなど本来ありえないものと思われる。しかしそれゆえにこそ、もしこの極度に凝固した意味の次元においても何らかの過剰をとらえることができれば、まさにそのときこの現象がたんに偶然のかつ付随的なものではなく、あらゆる言語に本質的に備わる特性であることが明らかとなるはずである。

やや遠回りとなってしまったが、このように『世界の散文』において「真理」の問題が提起される理由とは、「アルゴリズム」という数学的かつ理念的な真理の領域においてなお—本来は「文学的な言語」に特有の—〈過剰の現象〉が存在しうるかをいわば検証するところにある。つまり問題なのは「精密科学のうちにさえも、制度化された記号とその記号が示す真なる意味とのあいだに、それらすべてを支えるひとつの〈制度化する言葉〉があるかどうか」<sup>16</sup>を知ることなのである。この「制度化する言葉 (parole instituable)」というのは、平板な(とりわけ言語の)体系にある種の変化をもたらすと同時に、それを新たにシステムとして再構築するという両義的な「出来事」であるが、「語る力」をうちに孕むこの出来事を「精密科学」のうちにも見いだすこと(そしてそれによって前者の普遍性を証明すること)こそ、おそらくは『世界の散文』のメルロ=ポンティを「真理」の問題へと向かわせた動機なのである<sup>17</sup>。

それゆえ、ここでの「真理」とはまずは数学的な真理、文学的な精彩を欠き、つねにすでに同一のものとみなされる「不動の関係性の領域」にほかならない。「アルゴリズムと言語の謎」におけるメルロ=ポンティの試みは、いわば真理の不動性を言葉の動性によって転覆させようとするものといえる。

しかし、メルロ=ポンティがその転覆をもくろむこの古典的なイデアの真理とはじつのところいかなるものなのか。あるいは彼はそれをどのようなものとして考えていたのか。次節でメルロ=ポンティ固有の真理の理論を検討する前に、あらかじめこの点を明らかにしておきたい。

彼によれば、古典的な(とりわけ数学の)真理の概念にはふたつの特徴がある。すなわち〈意味の一義性〉と「新しいものの古いものへの内在」である。

はじめに〈意味の一義性〉については、メルロ=ポンティはこれをたえず批判しており、たとえば言語をひとつの対象に論理的に固定された意味の総体へと還元しようとする初期フッサールの態度がしばしば告発の対象となっている<sup>18</sup>。先に引いたように、アルゴリズムもまた言語をこのように〈意味しうるもののみを意味する〉よう強制するシステムであり、したがってここでは意味はあらかじめ何らかの対象に縛りつけられ、その関係はまさに一義的である。問題なのは、この〈意味の一義性〉が必然的に言語の過剰を抑制しようとすることであり、つまり「アルゴリズムという純粋な状態」においては、言語が本来もっている「超越」つまり過剰の力が生硬な記号のシステムのうちで消散してしまう。

続いて「新しいものの古いものへの内在」であるが、メルロ=ポンティはこれを(ウェルトハイマーの『生産的思考』に拠りつつ)整数の計算の例を用いて次のように説明している<sup>19</sup>。この計算というのは、1からnまでの連続する整数の和を求める(少年ガウスによって「発見」された)周知の方法であり、公式 $n(n+1)/2$ によってあらわされる。メルロ=ポンティはこの数式を例にとって、数学的な真理の領域においては何か $\dot{\cdot}$ が $\dot{\cdot}$ 新しく $\dot{\cdot}$ 生 $\dot{\cdot}$ じ $\dot{\cdot}$ る $\dot{\cdot}$ こ $\dot{\cdot}$ とは $\dot{\cdot}$ 不 $\dot{\cdot}$ 可 $\dot{\cdot}$ 能 $\dot{\cdot}$ で $\dot{\cdot}$ あ $\dot{\cdot}$ る $\dot{\cdot}$ と主張する。つまり何らかの数学的な存在(ここでは $n(n+1)/2$ )は、たとえそれが新たに発見されたものであるとしても、その発見の以前からつねにすでに真であり、ひとがそれを真あるいは偽とみなす判断に関係なくたえず真であり続けるとされる。この公式を私が発見したとき、「私がこのように新たな観点からこの[整数の]系列を考えることによってそこに導き入れる局面の変化は、あらかじめ数そのもののうちに含まれているように思われるし、私がそれまで気づかなかった関係を表現するときも、私は数の叡知的な世界に存在する真理の貯蔵庫のうちからそれを

たんに引き出しているだけのように思われる」<sup>20</sup>。この「真理の貯蔵庫 (réserve de vérité)」の中身は増えも減りもせず、新たに見いだされた(あるいはこれから見いだされるべき)真理はつねにみずからを(あるいは自身の別のかたちを)この貯蔵庫のうちに認めることになる。メルロ=ポンティは真理のこのような特徴をひとことで「新しいものの古いものへの内在」<sup>21</sup>と表現する。数学の真理には〈絶対に新しいもの〉など存在せず、それはつねに過去へと送り返される。あるいはこう言ってよければ、そもそも真理についてはその〈新しさ〉や〈古さ〉を語るができないのであり、それはまさしく時間を超脱した永遠の真理なのである。

このふたつめの特徴も同じく言語の過剰を制限する。なぜならここでいう過剰とは、まさに固定され体系化された記号の総体のうちに何らかの新たな(異質な)要素が一体系そのものを超越しつつ生じる(それによって言語に「穴が穿たれる (se creuser)」ような)現象であり、新しいものが古いものにつねに回収されるとなれば、そこにはこのような過剰の生じる余地はないからである。

## 2. 認識と真理

では、メルロ=ポンティはこのような古典的な真理の概念に代えていかなる(新たな)真理の理論を提示するのか。あるいはいかにしてうえで述べたような(発想としては少なからず素朴ともみえる)試みを実行しようとするのか。これが数学における〈過剰の現象〉の解明という動機に導かれた「アルゴリズム」の章の本来の目的であり、本節ではこれらの点について論じたい。

だがその前に、古典的な真理の概念がもつもうひとつの重要な特徴、すなわち真理の「実体化」についてふれておきたい。

メルロ=ポンティがいうには、数学の真理について語るときには、その存在がもつ(不変的な)「性質(propriété)」そのものではなく、むしろ対象を定義するさいの(展開可能な)「関係(rapport)」にこそ注目すべきであるが、しかしそれでもこの「関係」のうちに何らかの永遠性を求めること、あるいはうえでみたように、あらゆる数学的な関係の展開の可能性を「真理の貯蔵庫」のうちに送り返すことは許されない。もしそのように考えられるとすれば、それは真理というものを見誤っており、そしてこの見誤りの原因となるのが、真理を「何らかの物理的な実在において実体化する (hypostasier)」ことなのである<sup>22</sup>。たとえば砂上に描かれた図形をみて、その

図形のうちに後に発見されるであろうあらゆる数学的・幾何学的な真理をあらかじめ投影する(その図形はみずからにかかわるあらゆる真理をすでに「もっていた」とする)というのが、この真理の「実体化」である。したがって先に述べた「新しいものの古いものへの内在」という錯覚は、まさにこの真理の実体化のひとつの帰結として生じる。存在であれ関係であれ、真理はつねに何らかの現実的なイメージや形象へと還元され、ひとはそのうちに真理のあらゆる可能性を固定する。そのため繰り返すが、そこでは何か<sup>が</sup>新た<sup>に</sup>生<sup>じ</sup>るということはない。実体化はこのように真理の不変性・無時間性の構築に寄与する。

しかしこの「実体化」もやはり真理をとらえる誤ったやり方に過ぎず、メルロ=ポンティはすぐさま次のように続ける。「もしわれわれが数学的な存在について考えるときに、このような[考え方の] 基盤を取り去ることができたとすれば、数学的な存在は無時間的なものとしてではなく、むしろ認識の生成としてみえてくるはずである」。前置きが長くなってしまったが、メルロ=ポンティが『世界の散文』でつくりあげようとしている真理の理論のもっとも重要な特徴とは、真理をこのように「認識の生成 (devenir de connaissance)」としてみるころにある。つまり彼は、数学的な真理がいかに不変かつ不動にみえようとも、その本質はつねに「生成」の運動に巻き込まれていることを示そうとするのである。

だがひとくちに「生成」といってもその内実は単純ではなく、たんに不動の実体としての真理に何らかの運動やダイナミズムを対置すれば済むわけではない。問題は真理<sup>みずから</sup>をその生成<sup>において</sup>とらえることにあり、そこで重要となるのが「構造 (structure)」という概念である。続いてこの—メルロ=ポンティの哲学においてはもはや周知ともいえる—「構造」の概念と真理の問題との関係について考察してみたい。

ところで、うえで述べた真理の「実体化」、すなわち数学的な存在をつねに何らかの現実の事物に投影して考えてしまうという傾向や、そこから生じる真理の時間を超越する永遠性という錯覚は、じつは真理そのものの本質に由来している。「構造」の概念についてふれる前にこの点を説明しておきたい。

メルロ=ポンティは「アルゴリズム」の章で、数学的な存在と「知覚」とのあいだには「類比 (analogie)」が存在していると述べる。つまり真理とその認識との関係は、知覚される事物とその知覚との関係に等しいと彼はいうのである<sup>23</sup>。メルロ=ポンティによれば、知覚という作用には必然的に知覚される世界が先行しており、知覚の主体もつねにその世界のうちに巻き込ま

れているが、まさにこれと「類比的に、真理という存在はそれを認識する主体につねに先だっている。ここから彼は、真理が認識する主体にとって永遠かつ不変であるようにみえるのは、知覚される世界が知覚する主体にとってそうであるのと同じだという。真理の永遠性(という錯覚)は、知覚される事物や世界のそれから「類比」によって導かれるのである。

しかし重要なのは、この「知覚的な類比」<sup>24</sup>はそれ自身たんなる類比、つまり交わることのない平行関係ではなく、むしろメルロ=ポンティがいたいのは、真理そのものがつねに知覚や知覚されたものとの「接触のなかで」形成されるというより強い事実なのである。

われわれが円の本質を考えようとするときに、すでにそのあらゆる性質をもっている砂上の円を思い描きたくなる誘惑にほとんど抗しえないのは、本質についてのわれわれの観念そのものが、知覚によってわれわれに呈示されるままの知覚された事物—知覚そのものよりも年老いていて、即自的であり、主体に先立つ純粋な存在としての知覚された事物—との接触のなかで、またそれに似せてつくられるからである。そしてひとつの出来事でありかつひとつの真理に開かれているというのは、知覚においては矛盾ではなく、反対にその定義そのものとなっており、そのためわれわれとしても、数学に仕える真理というのはすでに知覚のうちに巻き込まれている主体のもとにあらわれ、この主体を知覚に結びつけている肉のつながり(liens charnels)を利用しているということを理解しなければならない<sup>25</sup>。

「知覚的な類比」は知覚と真理とのあいだに並行になりたつ関係ではなく、むしろ数学的な存在をつねに現実の「なにものか(quelque chose)」たらしめているのがこの「類比」なのである。そもそも、客観的な真理をつねに知覚あるいは知覚的な経験との連続性においてとらえようとする態度(純粋に理念的な存在としての真理を認めない態度)こそが、50年代のメルロ=ポンティの「真理の理論」の特徴のひとつであり、彼にとって重要なのは「知覚されたものの経験」からいかにして「真なるものの経験」へと至るのかを問うこと(ここには『幾何学の起源』のフッサールの影響をみてとることもできるだろう)、さらに「知覚された世界を保持しながらもそれを語られた世界へと変える昇華の途を見いだす」<sup>26</sup>ことであり、あるいはむしろ知覚とのこの「接触」が真理の形成が行われる条件であるともいえる。

ところが、この知覚と真理との「類比」はたしかに真理の条件のひとつではあるが、しかし



真理がつねに知覚された事物との接触のうちでつくられるとなれば、すでにみたように真理の「実体化」、ひいてはその永遠性という錯覚を避けがたく招くことにもなる。つまり数学的な存在が永遠かつ無時間的なものとしてわれわれにあらわれるのは、この存在がつねに知覚あるいはその主体に先立つ「知覚された事物」との接触のなかで、それに「似せて (à l'imitation de)」つくられるからであり、これについてメルロ＝ポンティは「われわれが真理は永遠のものであると思うのは、それが知覚された世界を表現しているからである」<sup>27</sup>と述べる。数学的な真理の永遠の「先在」、そのシステムの(見かけのうえでの)不変性は、じつはこのように「知覚された世界」との「類比」もしくは「接触」が導く必然的かつ本質的な帰結なのである。

数学的な存在はこのように知覚の世界との「肉のつながり」を利用し、それによって「みずからを叡知的な世界の反映であるかのように思わせる」<sup>28</sup>。真理が永遠であるようにみえるのは、真理そのものが現実には永遠であるからではなく、それがつねに知覚の世界と切り離しえないところに原因があり、したがって真理を安易に「実体化」してしまうのも、じつはわれわれにとって避けがたい傾向なのである。

もっとも、真理をこのように知覚との連続性においてとらえることのみがメルロ＝ポンティの真理の理論の特徴ではなく、また真理が永遠であることを知覚との類比に帰するだけで彼が満足するわけでもない。先に述べたように、彼は真理を「生成」の運動として描こうとしており、そしてこれもすでに述べたように、そこで重要となるのが「構造」という概念である。

メルロ＝ポンティによれば、真理とは実体や理念ではなく「構造」である。すでに真理を数学の「存在」そのものではなく、むしろその「関係」においてとらえることが提案されていたが、おそらくそれをさらに推し進めるかたちで、彼は真理をひとつの「構造」とする。「知の未来としての本質はそのものとしては本質ではなく、それは構造と呼ばれるものである」<sup>29</sup>。もちろんここで「構造」とは、純粋なアルゴリズムのように内的に閉鎖したシステムではなく、可変的で開かれたまさに生成の運動の場である。メルロ＝ポンティは『行動の構造』以来、つねにこの概念の可変性・可塑性を—そこに「構造化 (structuration)」という動的な契機を読み込みつつ—強調しており、したがって真理をひとつの構造とする主張にとくに驚きはないが、ここで興味深いのは、真理がこのように構造であるかぎり、それは偶然の歩みに身を任せるのではなく、「ひとつの意味 (sens) をもった全体へと向けて進んでいく」<sup>30</sup>とされることである。『世界の散文』でメルロ＝ポンティは、文学作品が主体のうちにまったく新たな意味やあるいは言語

そのものを生みつけ、それによって主体がそれまでもっていた言語の構造をすっかり組み換えられてしまうという体験について強調しているが<sup>31</sup>、ここで彼は真理の存在のうちにも同じような出来事をみている。つまり真理とはひとつの「意味」を中心にたえず全体の「構造化」を繰り返す存在であり、そしてその構造化というのは、みずからの引き金となっているその「意味」にいわば寄り添うかたちで、つねに「一貫して (cohérent)」行われる<sup>32</sup>。真理が「構造」であるというのは、このようにそれがひとつの新たな「意味」を中心に体系的な構造化を続けていく流動的な過程のうちにあることを示しており、そしてまさにその過程のうちこそ真理というものの本質がある。

それゆえ数学的な思考の本質というのは、ある構造が脱中心化し、ひとつの問いに向かって開かれ、新たな意味に応じてみずからを組織しなおす、まさにこの瞬間に存在するが、しかしその新たな意味というのは、これと同じ構造の意味なのである<sup>33</sup>。

ふたたび  $n(n+1)/2$  という数式を例にとりたい。うへの引用によれば、この数学的な存在の「本質」というのは、それがまず「脱中心化し」、さらに「新たな意味に応じて」みずからをあらためて構築しなおすその瞬間にあらわれるが、それはつまり「1から5までの進行が10から6までの退行と正確に対称であること」に気づくときであり、そのときはじめて私は(この数式があらわす)「数学的な真理」を手にする。それまで線的に秩序づけられていた整数の系列のうちに突如「新たな意味」が生まれ、それがその構造をいちど崩してしまい、しかしその意味を中心に構造がふたたびつくりかえられる。メルロ=ポンティにとって数学の「真理」が宿るのはまさにこの瞬間であり、したがって数学的な存在の「本質」は「叡智の天上」にあらかじめ仕舞われているのではなく、むしろたえず生成する「新たな意味」とそれによってもたらされる構造の再構築を条件としてあらわれる。

このようにメルロ=ポンティは、真理を可変的かつ動的な「構造」としてとらえ、それによって「真なるものの先在 (préexistence du vrai)」<sup>34</sup>という魅惑的な思考を徹底して退ける。真理が「認識の生成」であるという主張は、まずはこの「構造」のダイナミズム、それもランダムな運動ではなく、ひとつのしかしまったく新たな「意味」に貫かれつつ進んでいく、秩序だった展開によって理解される必要がある。

重要なのは、この「構造化」が認識する主体の制御のもとで行われるのではなく、数学的な存在みずからが自律的に発動する作用だということであり、いわば構造が自分で自分を崩しそしてふたたび構築するのである。もちろん実際には主体がいなければ真理の構造化が認識されることはないが、しかし問題なのは、それがつねに主体の意志や意図の外側で行われる(あるいはその結果を予測できない)ということであり、ここにわれわれが冒頭で定義した言語の〈過剰の現象〉をみてとることができる。構造化は閉鎖的な数学の存在が「新たな意味」の介入により内部から瓦解し再構成されるという運動であり、これはつまり構造そのものがみずからを超越していくという現象に等しい。そして同じく重要なのは、このとき生じたその〈過剰の現象〉によって、構造はたんにばらばらになってしまうのではなく、あらためて系統的に構築しなおされるということであり、構造化—あるいはメルロ=ポンティが「制度化する言葉」と呼ぶ「出来事」—は、このように崩壊と構築の二重の運動となっている<sup>35</sup>。

ところで、先に知覚と数学的な真理とのあいだの「類比」について論じ、それこそがメルロ=ポンティの50年代の思想を特徴づけるものであると述べたが、しかしだからといっていわゆる「認識」の働きが知覚の領域に全面的に回収されてしまうわけではない。数学的な存在はたしかに「肉のつながり」によってつねに知覚に結びつけられているが、しかし「それは数学の明証を知覚の明証に還元するということにはならない」<sup>36</sup>。メルロ=ポンティの本来の目的とは「数学的な思考が感覚的なものにもとづいているというのではなく、その思考が創造的(*créatrice*)であることを示す」<sup>37</sup>とどこにあり、つまり著者はここで「精密科学の言表を特徴づけている真理という性格に異を唱え」ようとするわけでも、ましてや「知覚されたものが属する秩序に対する認識の秩序の独自性」を否定しようとするわけでもない<sup>38</sup>。真理や認識というのは知覚に比してやはり何らかの「独自性」を保持しており、かりに前者が後者を表現しているとしても、それによって双方の位置する次元が完全に重なり合うことにはならない。「思考されたものは知覚されたものではないし、認識は知覚ではない」<sup>39</sup>のだから、「知覚的な類比」が介入するにもかかわらず、数学的な認識は知覚とは厳として区別されなければならないのである。

それではこの「認識の秩序の独自性」とはいったい何なのか。何が知覚と真理あるいは認識の次元を隔てているのか。

結論から述べるなら、ここで「認識の秩序の独自性」というのは、この「認識」が「知覚の意味」<sup>40</sup>を内面化するところにある。

認識が知覚のうちに根を下ろし、さらに知覚から区別されるのは、たったひとつの運動による。認識とは、知覚のうちで形成されると同時に知覚をつうじて逃れ去る意味をとらえなおし、内面化し、真に所有しようとする努力のことである<sup>41</sup>。

すでに述べたように、メルロ＝ポンティにとって知覚と真理とはひとつの連続的な関係のうちにある。しかしそれでも知覚の領域は真理や言語とは異なる（が「類比的な」独自のシステム（あるいは「スタイル」<sup>42</sup>）をつくりあげており、それゆえ知覚において形成された意味は客観的あるいは反省的な思考においてはとらえることができない。知覚には知覚の「無言で働きつつある言語」<sup>43</sup>というものが存在するが、しかしそこから生まれる意味はそのものとしてはいわばきわめてはかないものであり、知覚においてかたちをなすやいなやすぐさまそこから「逃れ去る（fuir）」。知覚から隔てられるかぎりでの「認識」とは、このように本質的にはかなく知覚から逃れ去ろうとする意味を「所有（posséder）」あるいは「内面化する（intérioriser）」働きなのである。したがってここで「認識」という言葉が示すのは、何らかのできあいの知や対象をわがものとするプロセスではない。「認識」は外部の対象にも内部の思考にもかかわらず、いまだ言語的でも概念的でもない「知覚の意味」へと向かい、この「意味」にのみ作用する。

しかし「認識」が知覚的な意味に働きかけるこの「内面化」とは、実際のところどのような作用なのか。じつはメルロ＝ポンティにおいてこの認識による知覚の意味の内面化というのは、たんにそれを概念的な意義へと象徴的に変質させる行為ではなく、むしろこの意味を中心に新たな次元をつくりだすことである。

私が知覚によって行う世界の把握がどれほどしっかりしたものであっても、それは私を世界へと投げやる遠心的な運動に完全に依存しているものであり、私がこの運動を取り上げなおすとしても、それは私みずからが自発的に世界の意義の新たな次元を設定する場合のみであろう。このとき言葉がはじまり、認識のスタイルが、論理学者のいう意味での真理がはじまる<sup>44</sup>。

知覚によって世界を把握するというのは本質的に「遠心的な運動」であり、つまり知覚におい

て主体はたんに内属という様態によって静的に世界と結ばれるのではなく、むしろ世界へと一方的に投げだされる。知覚のうちで生みだされる意味がはかないものとなるのは、おそらくはこのように主体がみずから行う知覚に対していわば受動的な立場に置かれるからであり、つまり知覚的な意味のはかなさというのは、それが象徴的な体系の外部にとどまるということ以上に、知覚が主体には統御できない「遠心的な運動」であることにもよっている。したがってメルロ＝ポンティによれば、知覚の意味を知覚の領域の外側で(しかもそれをたんに概念化することなく)とらえようとするなら、そのときこの意味を中心に新たな(「世界の意義(signification)」にかかわる<sup>45)</sup>「次元(dimension)」を形成しなければならず、これが彼にとっての「認識」、つまりは知覚の意味の「内面化」のあらわすところなのである。数学的な存在はつねに知覚との「類比」においてとらえられ、知覚世界と同等の水準でその「接触」のうちで形成されるが、他方で「認識」はみずからとは別の位相にある「知覚の意味」をあらためて取り上げなおし、それを「内面化」しつつそこに新たな「次元」を設定する。

このように「認識」が知覚に対してもつ独自性とは、それが知覚のうちで生みだされる意味を中心に新たな「次元」をつくりだすところにある。知覚はほんらい言語や言語的な認識とは異なる領域をなしており、その「意味」もわれわれがふつう用いる言語的な意味とは(たんなる「類比」以上には)共通点をもたない。しかしそれは「認識」によってみずからを中心に新たな次元を形成することで経験の礎となることができる。このとき知覚の意味はいわば次元化されたのであり<sup>46)</sup>、認識とは厳密にはこのような意味の「次元化(dimensionnalisation)」のことなのである。おそらく50年代のメルロ＝ポンティが探求していた知覚から言語への「昇華の途」のひとつがここにある。つまりそれはたんに知覚を概念のうちに固定してしまう作用ではなく、それによって経験の枠組み(「世界の意義」)を拡張させる働きである。

### 3. 真理と表現

ここまで『世界の散文』の「アルゴリズムと言語の謎」の章を読み解きつつ、そこで展開されている独特な真理の理論の特徴についてみてきた。それによれば、真理とは知覚と構造を二極とする「認識の生成」である。数学的な真理はつねに知覚の世界との「接触」においてつくられ、その「先在」を反映し時間を超脱した永遠の存在を装いつつも、しかしそのうちで自発的に生じる「新たな意味」を媒介にシステムとしての自己を超過し、それによってたえず構造

の生成を繰り返す。その瞬間にこそまさに「真理」と呼ばれる現象の場がある。しかし真理をこのように知覚の領域のうちに基礎づけるからといって、知覚と(いわゆる)認識の領分を混同することは許されない。「認識」には知覚とは異なる固有の役割(それもたんなる概念化とは異なる役割)があり、つまりそれは知覚のうちで形成され、象徴的にはとらえられない意味を内面化し、ひとつの次元(経験の規範)とする働きである。

ところで、われわれは本稿のはじめに『世界の散文』の真理の理論が「表現」という概念によって特徴づけられると述べた。最後に本節で、これまでにみてきた「認識の生成」としての真理の理論がどのようにしてこの「表現」の運動にかかわるのかを明らかにしたい。

まずは「表現」という概念について手短かに確認しておきたい<sup>47</sup>。メルロ=ポンティにとって「表現(expression)」というのは、何か心のうちにある思想を外へとあらわす行為ではない。このような行為は「翻訳(traduction)」と呼ばれ、「表現」はむしろそれに対置される。すなわちここで「表現」とは、それによってはじめて思考や意味がかたちをなす行為であり、メルロ=ポンティはこれを「実現(réalisation)」や「実行(effectuation)」という言葉でもあらわしている<sup>48</sup>。

重要なのは、この思考の実現としての「表現」は、意識そのものがみずからを実現し、さらには超越する作用だということであり<sup>49</sup>、つまりわれわれは、表現によって自身の新たな思考の到来に立ち会いつつ、自己そのものをつねに更新しそして乗り越えていく。これは見方を変えれば、表現を行うことでわれわれはより自分自身へと近づいていくということでもある。メルロ=ポンティはたとえば(『知覚の現象学』の時間性と主観性の根源的な同一性を論じるさなかで)「みずからを知る(se savoir)」というのが時間にとって本質的なことだと述べているが<sup>50</sup>、時間こそ主体を構成するもっとも根本的な契機だと彼は(ハイデガーにならって)考えており、したがってこれは主体自身にとっても本質的なものということができる。メルロ=ポンティにとって主体や意識というのは、つねにみずからを実現し超越すること、あるいはそれによって「みずからを知ること」のうちに存し、そしてそれこそが「表現」の働きなのである。要するに表現とは、自己を乗り越えることで自己を知り、たえず自己へと近づいていく、つまりはより〈自己になる〉という運動にほかならない<sup>51</sup>。

表現とはあらかじめ何も定められていない状況で手探りのうちに行われる運動であり、しかしそれによって表現の主体はその自己性の中心へと無限に進んでいく<sup>52</sup>。「認識の生成」としての真理がひとつの「表現」であるとわれわれがいうのは、まさに真理もまたこのようなあり方

をしているからにはほかならない。

すでに繰り返し強調してきたように、数学的な真理はその存在が構造化する瞬間、つまり「新たな意味」を介してシステムの脱中心化と再組織化が同時に起こる瞬間にあらわれる。「真理に固有の場所とはそれゆえ、その新たな意味のうちで思考の対象がこのように取り上げなおされるところにある」<sup>53</sup>。ところでメルロ=ポンティによれば、この構造化においては「真の意味の生成」<sup>54</sup>がみられる。つまり「新たな意味」を中心に真理の構造化が起こるさい、この意味そのものもまたみずから生成している。しかしここでいわれる意味の「生成 (devenir)」とは、そのたんなる「変化 (changement)」ではない。つまりそれは「客観的な継起、実質的な変換 (transformation)」ではなく、自己自身になること (devenir soi-même)、意味になること (devenir sens) である」<sup>55</sup>。意味はみずから引き起こす真理の構造化のうちで自身も生成するが、これはその意味が自分とは別の何かに変化するわけではなく、むしろ意味が意味になるという文字どおりの自己生成なのである。

これと相関的に、この生成する「意味」がもたらす真理の構造化も「最初にあった関係が消え去って別の関係に取って代わられる—そしてそこでは最初の関係はもはや認められなくなる—ような変化」ではなく、むしろ「徹底して自己を知り、それ自身と一致するような再構造化」<sup>56</sup>である。真理が「表現」であるというわれわれの主張も今や理解できるものと思われる。真理はまずは「認識の生成」、つまりは「新たな意味」が数学的な存在に課す構造化の現象のうちにあられるが、しかしこのとき(構造あるいは意味そのものに)生じている「生成」というのは、たんなる「変化」ではない。つまり構造化によって数学的な存在が可変的に生成するといっても、それはまったく別の構造へとシステムの全体が変換されるわけではない。むしろこのときその存在は(みずからを動かす「意味」とともに)自己を知り自己へと生成する(あるいは自己を実現する)のであり、つまりは—メルロ=ポンティ的な意味で—表現されているのである。

数学的な存在が「新たな意味」の到来によって構造化されるとき、はじめその「意味」は構造にとってまったく異質なものとみえるが、しかしそれはやはり—すでに引いた記述のうちにもあったように—その構造そのものの「意味」なのであり、あるいはその構造の「意味」になるのである。

こうして真理もまた〈自己を実現する〉あるいは〈自己へと生成する〉という「表現」の運

動のうちに書き込まれていることが明らかとなった。ところでメルロ=ポンティによれば、「その対象を汲み尽くす」<sup>57</sup>ような表現の操作というものは存在せず、そのため数学的な存在の「意味」はたえず「別の顕在化 (explicitations)」を求める。真理の構造のうちにはつねに「欠落」や「不透明さ」があり、「新たな主題化が引き続いてこの欠落を埋め、不透明さを解消することになる」<sup>58</sup>が、しかし理念的には完全な真理へと向かうはずのこの主題化も、現実にはつねに「部分的」であり、構造が孕む欠落を全面的に削除するには至らない。したがって真理はつねに不完全あるいは部分的なものにとどまり、あるいはここで真理というのは、むしろ(不完全な)真理が(完全な)真理になろうとする運動のことにほかならない。数学的な存在みずから自己を実現し自己へと到達しようとする一無限の<sup>59</sup>生成の運動、それが表現としての真理である。

ここで本節を終えるにあたって、この表現としての真理がもつ本質的な特徴のひとつを、本稿の第1節で明らかにした「新しいものの古いものへの内在」という古典的な真理がもつ特徴に比しつつ明らかにしてみたい。というのも表現としての真理の理論は、この抑制的な機能に代わる新たな機能を備えているからである。

メルロ=ポンティは数学において新たに見いだされる存在や関係がすでに以前のそれに含まれているという考え方、つまり「新しいものの古いものへの内在」という考え方を「回顧的な錯覚」とも呼んでいる<sup>60</sup>。彼はベルクソンに由来するこの言葉を初期のころより好んで使用しているが、これは現在の視点から過去の可能性をいわば回顧的に捏造するというものであり、数学において新しいものが古いものにつねに回収されるというのは、まさに「回顧的な錯覚」にあたる。しかしここでメルロ=ポンティは、この回顧的な錯覚に表現としての真理がもつ別の特徴を対置しており、それが〈新しいものによる古いものを取り上げなおし〉である。つまり彼によれば、可変的に構造化し生成していく真理の存在においては、新しいものは古いものに内在しているのではなく、むしろ新しいものが古いものを「取り上げなおし」「救いあげ」「含み込む」<sup>61</sup>。新しいもの(「新たな意味」)は古いもの(「獲得された意味」)を取り上げなおしさらには「忘れてしまう」が、しかしこれはたんに新しいものが古いものを消去するのではなく、前者が後者を「みずからと同一視し」「自分と見分けられないものにする」ということである。

このように表現としての真理においては、古いものが新しいものをそのうちに取り込むので



はなく、逆に新しいものが古いものへと働きかけるが、しかしここでもやはり〈新しさ〉や〈古さ〉といった区別は無効になる。なぜならこのとき、古いものは新しいものに取り上げなおされることでその一部となり、もはや両者のあいだに実質的な境界線は存在しないからである。数学的な存在がまだ孕んでいる不透明さもやがては透明さへと「転移(transposition)」され<sup>62</sup>、同時にその痕跡のいっさいが新たな真理の構造のうちでみえなくなる。「取り上げなおし(reprise)」とはつねにこのようなものであり、つまりここでは〈取り上げるもの〉と〈取り上げなおされるもの〉、あるいは〈含むもの〉と〈含まれるもの〉とが(それが実行されることによって)一致する。これは真理の構造化が自己(への)生成であることと無関係ではない。真理の新たな意味や構造は自分とは別のものに生成するわけではなく、真理とはあくまで自分自身になるという運動であり、そこで何か「取り上げなおされる」というならば、その何かとは結局は自分以外のものではないのである。

#### 4. まとめ

『世界の散文』は後半に近づくにつれて内容のまとまりのなさがより顕著なものとなる。「アルゴリズムと言語の謎」の章もやはり議論のねじれや論証の粗さが(ほかの章に比してさらに)目立つが、しかしわれわれが(ときに解釈をくわえつつ)その筋を再構成したかぎりでは、そこでメルロ=ポンティのいいたかったことはただひとつであると思われる。つまり真理とは不動の実体ではなく、知覚のうちに巻き込まれつつも新たに生じる「意味」を介してたえず崩壊と生成を繰り返す運動であること。あえて伝統的な文脈を意識して語るならば、アイデア論や対応説といった古来よりの真理概念に対して、あくまでその揺動性を強調するというのが、メルロ=ポンティの表現としての真理の特徴であり意義であるといえる。

だが注意すべきは、彼は真理の動的で不安定な生成にのみ一方的に与するわけではなく、むしろそれがひとつの透明な「真理」としてみずからを定着させるプロセスもその本質に収めており、それこそ彼が「制度化する言葉」と呼ぶ「出来事」なのである。「突如としてそのうちに穴を穿ち、自身の不透明性を失って透明性を露わにし、みずからを永遠の意味とする出来事」<sup>63</sup>である「制度化する言葉」は、象徴的に用いられるいわゆる言語ではなく、閉鎖的な体系のうちで自己に対し過剰となる働きでありながら、しかしその過剰を介してみずからをたえず更新し、さらに一般化していくような両義的な現象であり、メルロ=ポンティが「構造化」とも呼ぶ

この二重の現象こそが、真理が存在しうるただひとつの場である。「身体が世界内存在の媒体であるのと同じように」言葉が「真理へと向かうわれわれの運動の媒体である」<sup>64</sup>というのは、およそこのような意味において理解されねばならない。

---

<sup>1</sup> そのため、少なくともこの箇所を専一的かつ肯定的に論じた研究は論者のみるところこれまで存在しない。ただしそこでの数学に対する稚拙な理解を糾弾する批判的な研究としてはP. カス=ノグスのものが挙げられる(後に言及する)。

ところで『世界の散文』にみられるこの「緩み」というのは、あくまで推敲の不足によるものであり、そこに決定的な破たんや矛盾が指摘されるわけではない。本稿はこの緩みを一定の解釈によって補いつつ論を進めていくが、それはあくまでメルロ=ポンティ自身の論旨の不明確さを補てんするものに過ぎず、論者が個人的な主張を披歴するために、彼の議論を恣意的かつ独善的に利用し再構成するわけではないことをあらかじめ述べておきたい。その意味では、本稿はあくまでテキストの読解の域にとどまっているが、後に明らかにするように、この読解から真理という存在の新しいあり方を導きだすことが可能となるはずである。

なお本稿で使用するメルロ=ポンティの著作の略号は以下のとおりである。

PP, *Phénoménologie de la perception* (1945), Paris, Gallimard, coll. « Tel », 2002.

S, *Signes* (1960), Paris, Gallimard, coll. « Folio/Essais », 2001.

VI, *Le visible et l'invisible* (1964), suivi de notes de travail, texte établi par Claude Lefort, accompagné d'un *Avertissement* et d'une *Postface*, Paris, Gallimard, coll. « Tel », 2002.

PM, *La prose du monde* (1969), texte établi et présenté par Claude Lefort, Paris, Gallimard, coll. « Tel », 1969.

MS, *Merleau-Ponty à la Sorbonne : résumé de cours, 1949-1952*, Grenoble, Cynara, 1988.

P2, *Parcours deux*, Lagrasse, Verdier, 2000.

訳出にさいしては既訳を参考にさせてもらったが、訳語の統一などのためとくに断りなく変更をくわえてある。

<sup>2</sup> もっとも、本来(『世界の散文』を含む)1950年代のメルロ=ポンティの計画は、みずからの初期の研究(とくに「行動」や「知覚」の研究)の延長に「表現」と「真理」の理論を構築することであり、したがってここで真理が論じられるのもその文脈におけるもの(つまり知覚からいかにして客観的な真理が生まれるかを問うもの)と考えることができる。しかしとりわけ「アルゴリズム」という数学的な領域が問題になるさいには、後に述べるこれとは別の(だが関連する)動機が働いており、それが「文学的な言語」の分析にささげられた『世界の散文』全体の目的にも一致する。なお、同じく50年代に書かれた計画書によれば、アルゴリズムの問題は同時期に構想されていた『真理の起源』というもうひとつの著作において本格的に展開されるはずであり、この問題はおそらく『世界の散文』から『真理の起源』へと問いを架け渡す役割を担っている(P2, 43-45)。

<sup>3</sup> PM, 162.

<sup>4</sup> PM, 162.

<sup>5</sup> PM, 162.

<sup>6</sup> PM, 161-162.

<sup>7</sup> PM, 163.

<sup>8</sup> PM, 164.

<sup>9</sup> PM, 164.

<sup>10</sup> PM, 164.

<sup>11</sup> PM, 162.

<sup>12</sup> PM, 165. なお『世界の散文』における「対話 (dialogue)」の理論については、拙論「表現としての他者 メルロ=ポンティにおける他者の問題 (2)」(『フランス哲学・思想研究』第17号、日仏哲学会、2013年9月、158-167頁)を参照。

<sup>13</sup> メルロ=ポンティ自身この「過剰 (excès)」という言葉をしばしば使用しており、たとえば『知覚の現象学』では、われわれの思考のうちでつねに生じている「意味するものに対する意味されるものの過剰 (excès du signifié sur le signifiant)」について語っている (PP, 447)。

<sup>14</sup> PM, 166.

<sup>15</sup> PM, 166.

<sup>16</sup> PM, 170.

<sup>17</sup> しかしこれはあくまで動機であり、「アルゴリズム」の章の目的ではない。メルロ=ポンティにとって数学のうちに言語の過剰の力が宿るのは、じつは検証するまでもなく必然のことがらであり、後にわれわれが示すように、むしろそこからさらに議論のスケールを上げ、真理そのもののあり方を問いなおすという作業こそが、この章における彼の本来のねらいである。たんに文学的な言語と数学的な真理とを〈過剰の現象〉という視点から結びつけようとするにとどまらず、後者について概念的な革新を行おうとするところまでが『世界の散文』の真理の理論の射程となっている。

<sup>18</sup> S, 136-137.

<sup>19</sup> 前註でふれたカスー=ノゲスは、「アルゴリズム」の章のもっぱらこの例にのみもとづくメルロ=ポンティの数学に対する拙い理解と解釈を厳しく批判しており (Pierre Cassou-Noguès, « Le problème des mathématiques dans la philosophie de Merleau-Ponty », in *Notes de cours sur L'origine de la géométrie de Husserl, suivi de Recherches sur la phénoménologie de Merleau-Ponty*, Renaud Barbaras [sous la direction de], Paris, PUF, coll. « Épiméthée », 1998, pp. 369-404)、たとえば次のように述べている。「メルロ=ポンティは数学の特殊性をなしているものの横を通り過ぎてしまっているように思われる」(ibid., p. 369)。「メルロ=ポンティは知覚と言語の行為のうちには身を置いたが、数学の行為についてはとらえ損なっている」(ibid., p. 381)。「『世界の散文』の第四章は、もしそれが何らかの曖昧さにもとづいているのでなければ、端的にばかげたものとなっているだろう」(ibid., p. 383)。彼のこのような批判はきわめて正当なものであり、『世界の散文』が未完に終わっていることを差し引いても、そこでのメルロ=ポンティの数学の理解があまりに稚拙であることは間違いない。われわれとしては、この批判にさらなる反批判を行うのではなく、カスー=ノゲスがカヴァイエスに言及しつつ語っている「数学的な生成 (devenir mathématique)」という概念と、本稿の後半で述べるメルロ=ポンティの「表現としての真理」の概念の近接を示唆するにとどめたい。というのも、カスー=ノゲスによれば「数学とは自己自身の理解のためのたえず更新される努力のこと」(ibid., p. 394)であり、おそらくは一彼の意に反して一このような考え方が、メルロ=ポンティのいう「表現」の運動にきわめて近いものと思われるからである。

<sup>20</sup> PM, 167.

<sup>21</sup> PM, 168.

<sup>22</sup> PM, 171.

<sup>23</sup> PM, 172.

<sup>24</sup> PM, 175.

<sup>25</sup> PM, 173.

<sup>26</sup> PM, 173.

<sup>27</sup> PM, 174.

<sup>28</sup> PM, 175.

<sup>29</sup> PM, 172.

<sup>30</sup> PM, 172.

<sup>31</sup> PM, 22, 128.

<sup>32</sup> メルロ＝ポンティが A. マルローにならぬ—しかし彼とは異なる意味を込めて—「一貫した変形 (déformation cohérente)」と呼ぶ働きをここにも認めることができる (PM, 85-86, 147, 160)。

<sup>33</sup> PM, 178.

<sup>34</sup> PM, 176.

<sup>35</sup> 記述が曖昧であり解釈が困難なためはつきりとふれることができなかつたが、メルロ＝ポンティが真理と知覚との「類比」について語るさいには、このような〈過剰の現象〉としての構造化の契機も視野に入れていた可能性がある。というのも彼は「知覚的な類比」について、それがたんに知覚の世界の「先在」と真理の永遠性とのあいだに成り立つばかりではなく、知覚によって与えられるものが「みずからが担っているものをさらに越えるかたちで意味する」ということ、そして知覚されるものがわれわれにあらわれることができるのは、そのような（いわば過剰な）意味作用によってであるということ、この「類比」のうちに含めていると思わせるところがあるからである (PM, 172)。

<sup>36</sup> PM, 173.

<sup>37</sup> PM, 177.

<sup>38</sup> PM, 169.

<sup>39</sup> PM, 181.

<sup>40</sup> 注意しておきたいが、ここでいわれる「意味」とは先に真理の構造化において生じるとされた「新たな意味 (sens neuf)」とはひとまず別のものである。後者はあくまで閉じられたシステムがみずから「穴を穿つ」ようにして生成させるものであり、したがってわれわれが冒頭で述べた〈過剰の現象〉そのものである。しかし前の註で述べたように、知覚にも過剰な意味作用というものが存在しており、あるいはこのふたつの「意味」を同じものとみなすこともできるかもしれないが、メルロ＝ポンティがこの問いに明確な答えを与えていないため、はつきりとしたことはいえない。しかしいづれにしても、彼が（知覚であれ言語であれ）意味作用というものの本質をつねに何らかの〈過剰の現象〉のうちにみていたことはたしかなものと思われる。

<sup>41</sup> PM, 174.

<sup>42</sup> PM, 174.

<sup>43</sup> PM, 175.

<sup>44</sup> PM, 175.

<sup>45</sup> ここでいわれる「意義」はいまだ概念的なものではなく、したがって認識が生み出す「次元」も言語のような象徴的なシステムではない。次元とはむしろ主体がそれを介して経験を測る尺度のようなものであ

り、そのため「規範 (norme)」ともいいかえられる (PM, 85)。知覚世界に発する「意味」を次元化するというのは、主体が経験の新たな尺度をつくりだし、それによって新たな「世界の意義」(世界の「スタイル」)を見いだすということである。なお『世界の散文』における「意義」や「次元」については、拙論「メルロ=ポンティ意味論の構造 沈黙の概念をめぐる」(『年報地域文化研究』第14号、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2011年4月、264-283頁)を参照。

<sup>46</sup> メルロ=ポンティは『見えるものと見えないもの』のなかでこの「次元化された (dimensionnalis )」という言葉をつかっている (VI, 286)。

<sup>47</sup> すでに前註でふれたように、メルロ=ポンティはみずからの50年代の研究をたびたび「表現」と「真理」というふたつの言葉で特徴づけている。そこでの「表現」とは身体表現や絵画表現をあらわすごく一般的なものだが、われわれがここでいう「表現」は以下に述べるやや特殊な(しかし無論メルロ=ポンティのうちにその根拠を有する)意味合いをもっている。

<sup>48</sup> PP, 213.

<sup>49</sup> たとえば1949年度のソルボンヌでの講義のなかでメルロ=ポンティは(必ずしも表現の概念を定義する文脈のうちではないが)「表現」とは「それによって意識がみずからを実現する作用そのもの」と述べている (MS, 45)。

<sup>50</sup> PP, 487.

<sup>51</sup> E. レヴィナスは、いかなる「冒険」を繰り返そうとも結局は自己へと回帰する意識や思考のこのような運動を一オデュッセウスの遍歴になぞらえつつ「同なるもの (le M me)」への固執としてたびたび批判している (Emmanuel Levinas, *Totalit  et infini. Essai sur l'ext riorit * (1961), Paris, LGF/Le Livre de Poche, 1990, p. 12, 192)。この批判がメルロ=ポンティに向けられたものと考えると興味深い、詳論は別の機会に譲りたい。

<sup>52</sup> われわれのみるところ、少なくとも1950年代はじめまでのメルロ=ポンティの思想は、このような意味での「表現」の概念によって貫かれており、それゆえまさに「表現の哲学」と定義できる。

<sup>53</sup> PM, 179. ここで「意味」は *signification* であり、これは本稿の文脈においては *sens* のように思われ(したがって「意味」と訳している)、『知覚の現象学』と同じく『世界の散文』でもこのふたつの語の使用上の規則は必ずしも厳密ではないが、しかしすでに述べたように、*signification* は *sens* によって構造化された存在が認識の次元化を経てまとう「規範」にかかわるものであり、したがってそれを踏まえれば、ここでいわれているのは、「思考の対象」すなわち数学的な存在が、構造化の後にみずからの布置と規範を再構築し、それによって新たな *signification* を獲得するという事実だと解することもできる。

<sup>54</sup> PM, 178.

<sup>55</sup> PM, 178.

<sup>56</sup> PM, 178.

<sup>57</sup> PM, 179.

<sup>58</sup> PM, 179.

<sup>59</sup> 真理の形式化や一般化はつねに「執行猶予の状態 (en sursis)」にとどまり、決して純粋に理念的な真理として(つまり知覚から解放されて)完成されるということはない (PM, 150)。

<sup>60</sup> PM, 177.

<sup>61</sup> 真理は「ザリガニのように後ずさりしながら、みずからの出発点でありみずからがその意義を表現している構造へと振り向く」(PM, 179)。つまり古いものが新しいものを取り込んでしまうのではなく、つねに新しいものの方が古いものへと目を向け、そこに新たな意義を与えるのである。

<sup>62</sup> PM, 152.

<sup>63</sup> PM, 170.

<sup>64</sup> PM, 181.

## Vérité et expression Le problème de la vérité dans *La prose du monde* de Merleau-Ponty

Keiichi Yahata

Nous nous proposons dans cet essai de mettre au jour la théorie particulière de la « vérité » que Maurice Merleau-Ponty esquisse dans son ouvrage intitulé *La prose du monde*. Ce livre de 1951 devrait selon nous compter parmi ses chefs-d'œuvre, au même titre que la *Phénoménologie de la perception* et *Le visible et l'invisible*. Toutefois, peut-être parce que Merleau-Ponty a laissé ce livre inachevé et que celui-ci ne constitue donc qu'un manuscrit resté inédit de son vivant, *La prose du monde* n'a à ce jour que rarement fait l'objet d'une analyse sérieuse et approfondie.

Dans ces circonstances, nous mettons ici en valeur la centralité de ce livre en démontrant notamment la singularité de la théorie de la « vérité » qui y est exprimée. Cette théorie se caractérise en particulier par ce que le philosophe appelle le « devenir de connaissance ». C'est-à-dire qu'il considère la vérité non pas comme une entité idéale ou immuable mais comme un mouvement dynamique de « devenir ».

D'après Merleau-Ponty, l'« être mathématique » n'est pas à proprement parler une pure idéalité ni un système supra-temporel mais constitue une « structure » qui est toujours ouverte et mobile, et le *lieu* propre de la « vérité » ne se trouve qu'au moment précis où cet être *se restructure* et *se réorganise* autour d'un « sens neuf », lequel émerge de façon imprévue au sein de cette structure même et à la fois la déforme et reforme systématiquement.

Nous essayons enfin de montrer que cette nouvelle théorie de la vérité s'appuyant sur le mouvement d'un « devenir » constitue effectivement l'un des éléments importants de la « philosophie de l'expression » qui marque – discrètement mais profondément – la pensée de Merleau-Ponty des années quarante et cinquante. L'« expression » ne désigne pas chez lui la simple extériorisation d'un objet intérieur mais renvoie plutôt à un acte d'*auto-réalisation*. La « vérité » s'inscrit elle-même dans ce mouvement *expressif* : elle consiste à *se réaliser*, ou plus exactement ici, à « devenir soi-même » dans sa propre structuration. La vérité est bien le mouvement même *de devenir la vérité* de la vérité.